

こごみ 日和68

特集：捨てられていた魚でビジネス新潮流
株式会社 食一

地域活動レポート1：どうすればごみは減る？
～左京区地域ごみ減量推進会議の成長のひみつ～

地域活動レポート2：テーマは“暮らしの中からごみ減量”
楽しみながらエコ体験
～伏見区地域ごみ減量推進会議～

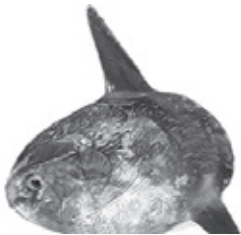
Hand in Hand：酒米を使ったお菓子作りで大津の魅力を発信
～大津高校家庭クラブの挑戦～

なごみ日和：京都ハンナリーズ KBS 京都 アナウンサー 海平 和
京都市ごみ減量推進会議 HISTORY3：
企業も講座運営に参画して
循環型社会形成にまっしぐら



活動報告：平成 28 年度市民等からの提案による
ごみ減量モデル事業助成採択団体

珍魚図鑑 ???



●●●●



●●●●●

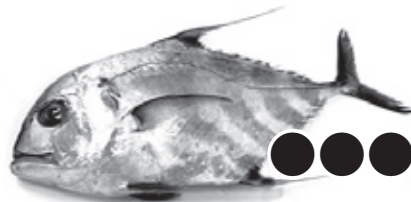


●●●

この魚たち、いくつ知っていますか？



●●●●●●●



●●●●●●●



●●●●●●●

ごみにまつわるこの数字なあに？

国連の食糧
支援量の **2倍** (約632万トン)

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」
をご覧ください。

写真は、海一流ウェブサイトより（魚の名前の正解は3ページ下部をご覧ください！）

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手とりあって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議

🔍 ごみ減 🔍 検索

特集

捨てられていた魚で ビジネス新潮流

株式会社 食一
代表取締役 田中 淳士氏



私たちが知らない魚が一杯 中には、捨てられている魚も

表紙に並んだ魚たち。名前を知ってる魚は？エッ、一匹も知らない…。

さて、ここでもう一つ、右の魚をご覧いただきたい。「ハチビキ」と呼ばれる赤色の魚で、包丁を入れると、身までも赤い。刺身にすると味も上々。評判もいいという。でも、どこで買えばいい？確かに、スーパーなどの魚売場では見かけない魚たちがいる…。ハチビキはほんの一例。市場に出回り、店頭には並べられる魚は、マグロ、サケ、サンマ、タラ、タイ、イカなど、なじみのある魚が中心だ。

日本の近海には約3000種もの魚が生息しているとされる。私たちが食べる魚種は、1割にも満たない。漁場では、市場には出せないが、漁師さんや地元の人々だけが食べる

魚があるという。見た目が良くないなどの理由で商品価値がないと判断された魚たちは、漁港で漁師たちが食べたり、地元の人に分けるという。

地元独自の調理法もあり、郷土食として愛され、地域の文化として継承されている魚も少なくない。それでも市場での商品価値がないと判断された魚は残ってしまい、最後には廃棄処分される。これが、四方を海に囲まれ、資源に恵まれているはずの日本の魚を取り巻く現実なのだ。



ウロコも身も赤いハチビキ

魚が食べられなくなる？ 危機感を募らせた

商品価値を持たない魚、市場では見向きもされない魚。ここに着目したのは、田中淳士氏。120年も続く魚の仲介業の家に生まれ、幼少期より漁業に親しんできた田中氏は大学で学ぶうちに、日本漁業のあり方に疑問を抱くようになる。減少傾向にある食用魚類自給率。増大する輸入量。高齢化し、後継者不足に悩む漁業就業者たち。漁業就業者は約17万人に減少し、近年、消費量も下降気味だ。「こ

のままでは美味しい魚が食べられなくなる日がやってくるのでは…」そんな思いが田中氏の胸に膨らんだ。

日本の食に欠かせない魚。1万年以上も前から、良質なタンパク源となり命を育んできた食材だ。かつて、漁港は大漁で賑わい、漁業経営は潤っていた。漁業の裾野は広く、支える産業も安定していた。ところがいつしか「漁業では食えない」、そんなイメージが定着。乱獲や200海里漁業専管水域の設定、需要と供給のバランスを欠いた状況、商品価値優先の経営など、衰退を招いた要因は複雑だ。

地元で食べられている魚を 早く、まっすぐ、消費者へ

田中氏は、地元で食べられているのに市場から落ちこぼれた魚に着目。これを従来の流通ではなく、産地直送で売ることができないのか。

水産の流通形態は、漁業従事者→産地卸売市場（卸売業者→産地出荷業者）→消費地卸売市場（卸売業者→仲卸業者）→小売店舗・食材卸問屋→小売店舗と、いくつもの段階を経て、消費者に届くという形が定着している。漁業従事者が水揚げした魚を新鮮な状態で、食

べてもらうためには…。田中氏は考えた。既存の流通構造にとらわれずに、直接漁港から消費者に届くかたちができないか。漁港から直接、魚を食材として仕入れているレストランや居酒屋へ届け、消費者に新鮮な魚の味を届けられないか。商品価値を持ち市場に出回る魚を直に仕入れるのは難題かもしれないが、市場に出回らない魚、地元の人だけが知っている魚、最後は捨てられてしまう魚なら、直接仕入というかたちでのビジネスが成立するのでは。田中氏は、自ら漁港へ足を運び、水揚げされる魚をその目で確かめ、包丁を持ち、調理して試食し、「美味しい」と勧めるに足りると見極め、仕入れる魚を決めていった。漁港であればどこでもというわけではなく、漁法・環境・取扱い

状況などをチェックし選定している。同時に魚を仕入れる現地スタッフを募り、協力体制を整えた。田中氏は『食を通じて社会を愉快地』という理念を掲げ、同志社大学ビジネスプランコンテストでの優勝を機に、株式会社食一を立ち上げる。2008年11月大学在学中のことである。



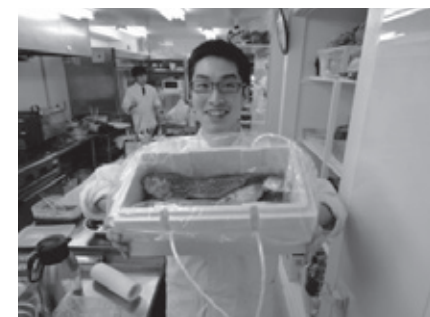
漁港に眠る宝を探して、現地を飛び回っている田中氏

珍魚のブランド化が成功 居酒屋・レストランで受け入れ

創業後、食一は、躍進を遂げる。田中氏が着目し「珍魚」と位置づけられる魚を「海一流」としてブランド化。居酒屋、イタリアンレストラン、回転寿司店など、他店との差別化を求める店舗に受け入れられる。特別メニューとして重宝がられ、得意先は今や約300店舗。京都だけでなく近畿一円を中心に拡大している。100を超える漁港と関わり、約200名の協力スタッフが活動するまでに。漁業者から仕入れた魚は、スタッフの手ですぐに発泡スチロー

ル製のボックスに入れられ、宅配便で注文先へ即発送。

受注から発送までのシステムについては、訪問、電話、メールなどで受注先と調整し、円滑運営を心がけ、漁港から新鮮な魚を届けている。



漁業者から届いた取れたての魚！！

スローフードにも似て、 持続型社会のありかたを具現化

これまでの漁業の構造改革ともなる、食一のビジネスモデルは、多方面から注目を集め、各界からの表彰も数知れない。2008年京都商工会議所「アントレプレナー大賞」受賞をはじめ、2010年、京都府と京都産業21が創設した「きょうと元気な地域づくり応援ファンド」（総額50億円）の事業採択を受け、弾みをつけた。

珍魚のブランド化、産地直送の流通形態でビジネス街道を突っ走る食一。環境の視点から見ても持続型社会の規範となるかたちを成している。田中氏は語る。もったいないから始めたわけではない。だが、事業を重ねた今、「捨てられている魚をもっと活かしたい」と念じるようになった

と。確かに、沿岸で捕れる魚を扱い、産地消費と同じ流通消費形態の確立、漁業従事者との共生、さらには海の資源との調和など、イタリアで提唱されるスローフードにも似た食一のビジネスは、循環型社会・持続型社会のあり方を体現している。

さて、食一が送り込んだ珍魚たち。提供している店に食べに行こう。涎が滴り落ちる前に。



「66art（ロクククアート・京都市右京区）」では6年前より食一から仕入れた魚をメニューに。この日は、コチ、イラ、ブダイなどが入荷

●株式会社食一

<http://www.shokuichi.jp/>

〒600-8387 京都市下京区大宮通高辻下ル高辻大宮町121 カンメン2ビル4階

TEL: 075-821-1900 MAIL: contact@shokuichi.jp

参考資料：水産白書平成27年版 農林水産 / 『魚はどこに消えた？』ウェッジ 片野歩著 2013年 / 農林水産統計 平成25年 / 平成24年漁業就業動向調査結果 / おさかな情報 no.31「日本の魚は何種類」2005.7 (財)水産物市場改善協会

森田知都子（平成28年5月16日取材）

表紙の魚の名前：左側上から マンボウ、ウチワザメ、ウツボ、右側上から ミシマオコゼ、イトヒキアジ、コショウダイ

どうすればごみは減る？～左京区地域ごみ減量推進会議の成長のひみつ～

まだ肌寒い3月13日（日）、「このイベントを開催することが念願でした。」と、『左京ふれあいecoフェスタ』開始前に挨拶したのは、左京区地域ごみ減量推進会議代表の中村貴司さん。当日の参加者は約500人。大盛況に終えることができたこのイベントの開催までの道のりは、平坦ではありませんでした。



東部まち美化事務所 百瀬次長と左京区地域ごみ減量推進会議の代表の中村貴司さん

「地域ごみ減」を活発にしたい

『左京ふれあいecoフェスタ』は、左京区内21学区の地域ごみ減量推進会議（以下、地域ごみ減）が総力をあげて開催した初めてのイベント。左京区では地域ごみ減発足当初の平成8年から長い間、28学区中10学区しかなく全体で活動が盛んとは言えない状況でした。待たなしのごみ問題を少しでも解決するためにも、地域ごみ減の立ち上げが重要だと考えていた中村代表。エコまちステーションのスタッフと共に平成26～27年度の2年間、リーダーを担ってくれそうな地域の方々に対して、ごみの現状や、地域ごみ減の重要性など丁寧に説明することによって、ごみ減量の活動を行う学区を、倍以上である21学区まで増やすことができました。中村代表は、「地域ごみ減立ち上げに重要なのは、



「どれがいいかなー」たくさんのおもちゃに悩む子どもたち

リーダーの存在」とおっしゃいます。リーダーとなる方の存在があるからこそ、みんなが率先して取り組む左京区地域ごみ減へと成長したのでしょうか。

「知る」ことから始まる、ごみ減量

21学区に増えた地域ごみ減がまず取り組んだのは勉強会です。「ごみがどう生まれて、処理されていくか、なぜごみを減らす必要があるかを知ってもらうことが行動につながる一番の近道だ」という、中村代表の想いからでした。「知る」こと、「体験する」ことによって生まれる「行動」を地域のごみ減量につなげることが目的です。「知る」の部分は勉強会を開催し、みんなが「体験する」ことができるイベントの開催につなげました。半年かけてじっくりと行ったイベントの準備は、左京区内の地域ごみ減だけでなく、左京エコまちステーション、東部まち美化事務所が一丸と



開始前は長蛇の列

なつての取組となり、地域一丸のコミュニケーションをはかることができ、今後の活動につながる大きな一歩を踏み出しています。

『古着やおもちゃ、日用品を「いらないひとから、いる人へ」ごみにしない仕組みをつくる』

今回のイベントは、『古着やおもちゃ、日用品を「いらないひとからいる人へ』をテーマにした交換会です。この流れは、地域からごみを減らすことだけでなく、ものを大切にするという心を育てることにつながります。

イベント開始前、会場前には長蛇の列ができていました。地域のイベントにいつも参加している方から、区民日よりや回覧板を見て初めて参加された方まで顔ぶれはさまざまでした。

参加者の方からは、「子ども服を出して、おもちゃや子ども服をもらいました。使わなくなったものは、近所にまわしたり、こういうイベントに持ってきたりしてなるべく物を捨てないようにしています」というのは、早速もらったおもちゃで遊んでいる2人の子どものお母さん。ご夫婦で食器を見ていた男性は、「掘り出し物を見つけにきました。これからゆっくり楽しみます」と、まるで宝探しをしているかのよう。子どもから大人まで、みんなが楽しめるイベントとなりました。

終わりごろには、おもちゃや陶器類などはほとんど無くなっていて、リユースの輪が広がっています。「今回、いいスタートを切ることができました。地域の方と一丸となつて、これからもさまざまな活動を続けていきたい」と、中村代表はこれからの展望を語っておられました。左京区地域ごみ減量推進会議のこれからの活動に期待です。



ご夫婦で仲良く選ばれている姿も

前田綾（平成28年3月13日取材）

テーマは“暮らしの中からごみ減量”楽しみながらエコ体験

3月13日（日）、伏見区総合庁舎で「エ～コと伏見2016」が開催されました。伏見区地域ごみ減量推進会議（以下、伏見区地域ごみ減）主催によるこの取組は、今年で4回目。フリーマーケットをはじめ、エコ工作やパッカー車（ごみ収集車）の積込み体験、お茶席、地元野菜の販売など、伏見区内の環境活動に取り組む団体と協力して、それぞれ工夫を凝らした出店や展示を行い、家族連れなど多くの人で賑わいました。

楽しみながら理解を深める環境ブース

会場となったホールの中中央にはお茶席が設けられ、その周りにいくつものブースが並びます。廃材や、自然素材を使って工作体験ができるブース、環境に関するクイズや紙芝居のブース、地元でとれた農産物販売するブース、そしてスタンプラリーもあります。子どもたちは思い思いのブースを訪れ、物作りやクイズに挑戦。プラスチックを再資源化した樹脂ペレットを布袋に詰める「お手玉作り」、竹の端材で遊具を作る「竹ぼっくり作り」、端切れで自由にクラフトが楽しめる「工作コーナー」、宇治川河川敷の葦を使った「葦簀（よしず）作り」、牛乳パックを使った「紙コプター作り」、ごみの分別クイズ



ブースはどこも、大賑わい



紙芝居がはじまるよ～

体験を通して“ごみ減量”をぐっと身近に

フリーマーケットの会場には、30店がにぎやかに出店。衣類や家電、食器、おもちゃなどリサイクル品から手づくり小物まで、所狭しと並びます。訪れた人々は、じっくり品定めをしたり、出品者と会話を交わしながら買い物を楽しんでいました。

駐車場では、パッカー車の積込み体験が行われ、黄色いごみ袋を手にした子どもたちが、少し緊張した面持ちでパッカー車にごみを積み込みます。ボタンを押すとプレートが回り出し、ごみ袋が消えていきます。自分が積み込ん

だごみ袋がパッカー車の中に飲み込まれていくのを興味津々で見入る子どもたち。「これからごみの出し方も気をつけたいね」と親子で話す姿もありました。

一人ひとりの意識を高めることから

「ごみ減量」とは何ぞや。まずはそこからです。そう語るのには、深草支所・醍醐支所を含め、全31学区を有する伏見区地域ごみ減の代表、村瀬克子さん。下鳥羽地域ごみ減の会長でもあります。学区ごとの地道な活動も大切ですが、伏見区全体で力を合わせれば、地域を巻き込んで大きな事ができるのではと考えたのが「エ～コと伏見」を始めるきっかけ。「これをやったから、これだけごみが減るというものではないですが、楽しく遊んだり、体験を通していろんなことに気づいたり、親子でごみのことを考えるきっかけになってくれたら」と村瀬代表は言います。ごみ減量を呼びかけても、その意味が理解されないままでは、“やらされている感”が増幅するだけ。まずは市民の意識を高めるのが先決で、ごみ減量はその結果として付いてくるものです、と。



伏見区地域ごみ減量推進会議の代表 村瀬克子さん

地域の自然や文化を、次世代に継ぐ

当イベントで毎回人気を集めるのが「お茶席」。酒処としても有名な伏見は、良質な地下水に恵まれた地です。このお茶席では、その地下水を使って地域女性会の皆さんがお点前を披露します。野点傘と緋毛氈（ひもうせん）の床几（しょうぎ）でしつらえたお茶席は、伏見の歴史や文化を伝える場であると同時に、一服しながら気軽に交流できる場として好評を博しています。「日本の伝統文化に触れていただくのに、手を抜いてはせっかくのお抹茶が台無し。こういう場でもおもてなしの心は尽くしたい」と着物姿の村瀬代表がきりっとした表情を浮かべます。



お抹茶で一服

「京都はきれいなまちだと言われますが、ポイ捨てなどもなくなりません。市民の皆さんにもっとごみに対する関心をもっていただきたい。今日、家に帰ったら、身近なところからごみを減らすよう心がけてもらえたらうれしいですね」。若い世代に、身近な環境や地域の文化にもっと興味をもってほしいと願う熱い思いが込められた活動は、まだまだ続いていきます。

藤原幸子（平成28年3月13日取材）



酒米を使ったお菓子作りで大津の魅力を発信 ～大津高校家庭クラブの挑戦～

琵琶湖は、よく知られているように近畿の水がめという重要な役割を担っています。最も近い京都はもちろん、大阪、兵庫へ水が供給されており、近畿に住む1400万人の生活を支えています。今回は、この琵琶湖のすぐそばにある滋賀県立大津高等学校に伺い、同高校家庭クラブのユニークな取組取材しました。

酒どころ 滋賀県の高校ならではの挑戦

「酒どころ」とは、よいお酒の生産地として知られるところ。滋賀県は、この酒どころが多いことでも有名です。そして、現在でも、琵琶湖上の飛び地「権座」まで田舟で渡って、田んぼを営んでいる農家さんもいらっしゃいます。この貴重な日本の原風景を名前にした酒米「渡舟」を原料にした日本酒が「権座」。大津高校家庭クラブは、この「権座」の製造過程から出る米粉を使ったプロジェクトを進めています。

日本酒の製造過程で排出される米粉

日本酒はお米からできていますが、一粒を全部使うわけではありません。日本酒には「精米歩合」という基準があります。精米歩合とは日本酒製造に使うお米の芯の部分。例えば、精米歩合70%とラベルに記載されていると、その日本酒は玄米の外側30%の米粉を廃棄し、内側の70%の芯の部分の原料として使っている、ということ。

この廃棄される米粉に注目し、これを使ったお菓子の開発に挑戦しました。

家庭クラブの米粉クッキーの味は？

目指したのは、和菓子のような優しい味のクッキー。開発で大変だったのが、食感と香りの部分だとか。米粉を原料にすると、米のでんぷんによって歯にまとわりつく食感が残ります。しかも、本来お酒になるはずの原料のため、ぬか臭さも残る。これらの課題を、あんやアーモンドパウダーを入れる等、副材料の種類と配合を変え、試行錯誤の上クリアしました。そして、現在でも、さらなる上質な味わいを求めて研究中です。



顧問の横井裕子先生

「このプロジェクトの真の狙い」を語る！

取材の最後に家庭クラブの顧問 横井裕子先生に、このプロジェクトの目指すところを伺いました。「今回開発した商品は、校内販売の他、地元商店街でも販売しています。高校生が開発したお菓子で、地元の活性化につながれば！」と語っていただきました。続けて、「プロジェクトに参加する生徒は商品開発から販売促進まで一連のスキームを実践的に学んでいます。この経験は社会に出てきつと役に立つはず」と、力を込めました。

先生の語る内容にしっかりとうなずく生徒たち。大津の未来は、きっとこの生徒たちのように元気いっぱいではない！

※お菓子の売上金は、被災地熊本県の大津高校（なんと同じ名前！）に全額寄付されます。



製造の様子



販売の様子

高野拓樹（平成28年5月30日取材）

なごみ日和



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●●第10回 「京都ハンナリーズ」●●

プロバスケット 京都ハンナリーズの今季の戦いが終わりました。2005年に開幕したプロバスケットボールリーグ「TK bjリーグ」。今年の秋からはNBLリーグと統合し、新リーグ「Bリーグ」が開幕するため、TK bjリーグとして最後の戦い。京都ハンナリーズは去年に続き、レギュラーシーズンを西地区1位で終えプレイオフへ。去年はそこで敗れ、西、東それぞれ2チームずつが出場し優勝を決める有明の地「東京 有明コロシアム」へ進むことはできませんでした。ですが今年は2季ぶり4回目の有明の地へ。最後のリーグで今年こそ悲願の初頂上へ！！期待は大きく膨らみ、選手達の意気込み、自信も相当なものでしたが、結局京都ハンナリーズは有明では勝てず4位でシーズンを終えました。独特な雰囲気、一発勝負の厳しさ、涙を流す選手の姿からは様々な思いが伝わってきました。

有明前の取材で印象的だった言葉がありました。村上主将の「自分たちはチームを信じることはできている、しかし時として

自分を信じるのが1番難しいこともある。今までやってきたことを信じてやるのみです」というもの。京都ハンナリーズの浜口ヘッドコーチが「もっと自分自身を信じていい」と口にし、それが胸に響いたのだとか。

よく「自信」を持ってといいますが、「自信」は自らを信じると書きます。確かに重要なことですが、難しいことです。では、自信を持つために何が必要なのか。

先日、番組コメンテーターとして元サッカー選手の望月聡さんが来られた時、こんな話をしてくださいました。「凡事徹底」、当たり前のことを徹底的にする、その積み重ねが実を結ぶ、それが自信になっていくのだと。それがなかなか結果につながらないこともあるけれど、結果を出す人は必ずそうしているし、今すぐにいい結果にならなくて焦ったとしても、そこで終わりはしない。つながっていくのだと。これは何にでも言えることではないでしょうか？



京都ハンナリーズも今までの積み重ねを、さらに進化させて新リーグでみせてくれるでしょう。そして自分自身も「凡事徹底」、もっと自分を信じられる自分になりたい、そう感じさせてくれたチームでした。

海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「newsフェイス」「京都あかでみー」などに出演中。

京都市ごみ減量推進会議 HISTORY

3

当会議は、平成28年11月に設立20周年を迎えます。

企業も講座運営に参画して循環型社会形成にまっしぐら

ごみ処理や減量は行政の役割、と思われていたころ、京都市ごみ減量推進会議は、市民と事業者、行政の3者によるパートナーシップによる組織体で発足し、事業運営を行ってきた。今回は、企業を中心とした動きを振り返る。

平成12年、循環型社会形成推進基本法が制定され、関連法が矢継ぎ早に整備される。家電、食品、建設に続き、自動車リサイクル法、先に制定されたグリーン購入法と並び、体制が整う。その流れの中、「循環型社会とは？」「リサイクルはどうすればいい？」企業は、情報収集に血眼になっていた。

ごみ減では、京都商工会議所との共催体制を組み、コーディネーターとして企業の担当者も加わり、企業向けに「エコロジーはエコノミー ごみ減量実践講座」をスタートさせた。12年度は「ゼロエミッションの実践」「家電リサイクルの実状」などをテーマに5回開講。13年度は、食品リサイクル法など、翌年は、自動車リサイクルや、環境会計をテーマに開催した。狙い通り、毎回、多くの企業の担当者が参加し、情報を各社に持ち帰った。企業の環境への取組はすばやく、ゼロエミッションを100%近くまで達成する企業も少なくなかった。テーマは年を追うごとに進化し、平成20年には「CSR(企業の社会貢献)」、「省エネルギー・新エネルギー」も視野に入れた講座に発展した。

そして今、企業の環境への取組は、安定期に入ったかのようだ。しかし、地球温暖化が進行するなど問題は山積み。企業が環境活動の実績を活かし、地域や市民、そして企業同士のパートナーシップを組めば、問題解決の大きな力となるのではなからうか。

森田知都子（平成28年6月10日取材）



「産廃問題を斬る！その後」(講師：石渡正佳氏)の様子(平成24年度)

平成28年度市民等からの提案による ごみ減量モデル事業助成採択団体

当会議では、京都市内のごみの発生抑制やリユース、リサイクルなど、ごみの減量につながる企画及び取組を市民団体等から公募し、助成しています。

1～2月に募集を行い、3月に審査委員会を経て、以下の10団体が採択されました。皆さん、応援・参加をお願いします。

先進的モデル事業助成（家庭ごみ減量モデル）（1件）

団体名	おむつなし育児研究所京都サロン
代表者	代表 西山 由紀
事業名	赤ちゃんからはじめるエコな子育て！ 「0歳からのおまる」できずなを深めよう

0歳からおまるを取り入れることで、母子の絆が深まり赤ちゃんの情緒も安定するだけでなく、おむつごみの大幅な減量が可能となる。0歳からのおまるを普及させるためには、イベント（7月10日予定）等での啓発に加え、妊婦教室等において、授乳同様に伝承される必要があると考える。この事業では、環境面からその足掛かりを作るために、おむつごみがどのくらい減量できるか、アプリを活用して調査と集計を行う。また、ごみ減量に取り組む家庭へのフォローアップを実施したい。

地域活動事業助成（9件）（五十音順）

団体名	NPO法人コンシューマーズ京都
代表者	理事長 原 強
事業名	2Rで、老いる前の物の整理を

「老いる前の物の整理」を呼びかけ、普段の生活から不要なものを買わない、いらなくなったものを譲り合う「2R市民」（2R型の生活・行動ができる市民）を増やすとともに、いざという時には「遺品」の「分別整理・再資源化」を行うことができるように「遺品整理」にかかわる人・組織・情報・システムのネットワークの形成、「遺品整理」システムモデル開発をめざす。（情報交換型イベントの開催（9月21日予定）と、それをまとめたパンフレットの作成を行う）

団体名	北区地域ごみ減量推進会議
代表者	代表 山本 玉幸
事業名	北区ECO祭り

ごみ減量は一人ひとりの意識改革が大切である。これまでも開催してきた「北区ECO祭り」を地域のメンバーの自発的な取組として実施する（10月30日予定）。各地域で行っている環境への取組のプレゼン・展示や、生ごみ処理機の展示、生ごみを乾燥させるプロセスの展示やささまざまな環境に関するクイズやアンケート、フリーマーケットなどを行い、意識を高めていく。

団体名	京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会
代表者	会長 山内 寛
事業名	地域におけるごみ減量と2Rの促進の活動

「しまつのこころ条例」が施行され、ごみ半減へのさらなるごみ減量促進が求められている。京都市ごみ減量推進員経験者の会として、地域に積極的に関わり、啓発活動を行ってきた実績を基に、シンポジウムの開催（7月30日予定）や3R実践ガイドブックの作成などを行い、ごみ減量の普及啓発活動を進める。

団体名	「体操服いつてらっしゃい、おかえりなさい」プロジェクト
代表者	創始者 岡部 達平
事業名	ひろがれ！ねざせ！ 「みんなで一緒に、体操服のリユース・リサイクル」

説明冊子での啓発が功を奏し、市内参加校は97小学校、9中学校となり、卒業式シーズンには本格的な回収が始動している。しかし、子どもたちがしっかり理解をして、主体的に体操服のリユース、そしてリサイクルに取り組むことを実現し、継続することは、毎年の地道で重点的な啓発活動にかかっている。また、中学校の参加率はまだ低調であり、積極的に中学校と打ち合わせを行い、取組へと進めていきたい。そのため、広報資料の増刷や新たな広報資料作りを行い、事業を深化させる。

団体名	中京区地域ごみ減量推進会議
代表者	代表 川崎 元彦
事業名	エコで子育て支援！ こども用品「おさがり」ネットワークの構築と既存事業の拡充

これまで竹間学区として実施してきたこども服の交換会を、中京区全23学区の地域ごみ減量推進会議の設立を契機に中京区全体の取組としてリニューアル。地域全体で積極的に「おさがり」ネットワークに参加できる環境を創出したい。イベントの会場では、ワークショップやおもちゃの修理ブースも展開し、「リユース」だけでなく、「リペア」や「もっぺん」などの言葉や体験も身近に感じられるイベントにする。（5月5日実施）

団体名	向島駅前まちづくり協議会
代表者	会長 福井 義定
事業名	高齢化社会のごみ処理問題への対応 ー「生ごみから作ったたい肥による野菜作り」

向島ニュータウンでも、日々、ごみ減量に取り組んでいるが、ごみ処理は依然として大きな社会問題である。なかでも生ごみは水分量が多く輸送・焼却に大きなコストがかかり、さらに減量に取り組む必要がある。また、地域には住民の高齢化と独居世帯の急増の問題がある。この二つの課題解決に、生ごみのたい肥化による「ごみ減量」と、野菜作りをととした高齢者の「生きがいづくり」、「居場所づくり」を実践したい。

団体名	めざせ！京都土産エコ包みプロジェクト
代表者	世話人 森田 知都子
事業名	京都観光土産エコ包みコンテスト

近年、過剰包装は少なくなったものの、省資源や分別しやすさなどの課題を持つ土産物の包装について、日本・世界のモデルとなる包装を選ぶ「エコ包みコンテスト」を実施。観光客が急増する京都市で、エコ度を極めた京都らしい観光土産の形を創出するための事業を行う。

団体名	桃山エコ推進委員会
代表者	委員長 大倉 正暉
事業名	ごみ減量を次世代に伝えるエコ地域づくり

昨年度実施した環境の学習会とワークショップで築いた基盤を基に、さらなるごみ減量の意識の定着をはかるため、特に子どもたちへの環境教育（学習会やワークショップ、子どもたちが参加する地域行事への出展、出前事業など）を実施する。また、ロケットストーブの制作・実演・頒布そして生活利用の推進は、今年度も推し進める。アウトドア調理・非常時の防災利用から日常調理用へと力点を移し、ごみ減量・再生エネルギー利用を拡大する新たな仲間を交えながら、エコ活動の改善・発展をめざす。

団体名	Ladies' Eco Circle プラムロード
代表者	代表 西井 博子
事業名	EcoおばちゃんProject2016

子どもたちによりよい地球環境を継承するため、次世代との連携を大切に「持続可能なコミュニティー」を構築、将来の環境リーダーを育む。夏祭り（8月6日予定）、エコバスツアー、勉強会や、畑を拠点とした農作物の循環を体験するエコシュールを実施（年間を通じてほぼ毎月）。子どもたちの自主性を育みながら、活動拠点を増やしていく。子どもたちとエコな取組のミニ広報も作成する。